

総 説

「神秘劇 (Mystère)」 — キリスト降誕劇の起源 —

東 彩子 植村 和彦

〈要 旨〉

中世ヨーロッパ各地において、「神秘劇」とよばれる聖史劇が大流行した。この劇は、教会にとっては、文字の読めない民衆に対しての宣教・伝道の手法であり、民衆にとっては、あらゆる階層のものが町をあげて共に祝う祭典として、両者の一致の元に発展を遂げた。各国によって形態は様々であったものの、旧約聖書・新約聖書の天地創造から最後の審判までの数十のエピソードがサイクルとして作られ、大聖堂内のみならず、町を循環する山車の舞台において展開された、中世唯一最大のマスコミュニケーションであった。

本稿では、世界各地において、様々な規模で復興がみられる「神秘劇」の宗教的・音楽的起源を探り、現代における神秘劇の可能性を追求していく上での起点となる考察を行う。

キーワード：中世、神秘劇、サイクル(劇)、聖体祭 (コーパス・クリスティ)、トロープス

序 論

キリスト教主義の幼稚園や保育園において、「キリストの降誕劇」は、年間行事のクリスマス礼拝における最後を飾るプログラムとして、毎年盛んに行われている。そもそも日本において最も古いキリスト教の劇の記録は、戦国時代のキリシタンの劇にまで遡るが、現在一般的に行われているものは、明治時代の宣教師が教会や幼稚園を通して紹介したものであり、今日でもカトリック・プロテスタントの区別なく行われ、保護者や子どもたちにとっても、関心の高い行事として続いている。ミッションスクールにおいても宣教師によってもたらされ、日本の各地で展開されているが、その起源について知る人は少ない。近年、我が校においても学生・教職員参加型の降誕劇が行われているが、その起源について語られることはなく、伝統的行事として認識・実践されている。この各地で行われている毎年恒例の降誕劇の起源を遡ると、中世ヨーロッパの「神秘劇」に辿りつく。キリスト降誕劇はあくまでもその壮大な劇の一場面に過ぎず、神秘劇の全容を知ることが今後のキリスト教保育・教育の現場における作

品作りにおいても、大いに参考になると考えられる。本論文では、この「神秘劇」の起源を宗教的側面と音楽的側面から探り、信仰と芸術の融合を極めた中世の洗練された宗教劇の世界より、現代に復興され次々と再演が試みられている新たなキリスト教劇の世界へ、新しい息吹を投じることを目的とする。

I 「神秘劇」とは

キリスト教の芸術は、キリスト教が国教化されていた中世ヨーロッパにおいて、最高水準にまで極められ、その後の全世界に計り知れない影響を及ぼした。その根本にあるものは、神への賛美、民衆の教化、そして宣教・伝道、という三つの目的であったと言えよう。大聖堂の建築・壁画・彫像・ステンドグラス、楽器製作、聖歌の作曲、祭儀のための染色やテキスタイル、印刷技術など、規模や形態は様々であってもその芸術的広がりには先の三つの目的のいずれかに当てはまる。これらの芸術の発展と共に、10世紀から16世紀にかけて、ヨーロッパ各地において、「神秘劇」と呼ばれる宗教

劇が大流行した。この劇の全盛期は15世紀と言われていたが、ラテン語で書かれていた聖書は、一般市民にとっては解読不可能なものであったため、演劇は教会と民衆との媒体としての役割を果たしており、聖書や祈祷書以上に親しい存在であった。人口の大部分が文字を読むことのできなかった時代、民衆の教化にとっては、その規模と効果において、演劇に勝るものはなかった。世紀を超えて愛されたこの神秘劇は、宗教上の理由で衰退させられることがなければ、更なる発展を見せていたと考えられる。絶えず時代の先端を走り、大衆の心をつかむため、常に新しいことに敏感でなければならなかった。ぶどう酒を入れる新しい皮袋、流行のファッション、流行歌、時事問題をいち早く取り入れ、庶民の日常生活や言葉、慣習に敏感に作られていた。中世の宗教劇研究家の石井は「大勢の庶民を一同に集めて情報を提供し、人びとの教化をねらった演劇は、中世で唯一最大のマスコミュニケーションの手段でありました。表現されたとたんに消えてしまう、複製不可能な芸術ですから、書物のようにその姿を現代にまでとどめることはできませんでしたが、書物や造形美術に劣らず、いやそれ以上に民衆の教育や文化の創造に大きな役割を果たしたのですⁱ。」と述べている。

この神秘劇は、日本語では典礼劇、とも訳されるが、フランス語ではMystère、英語では一般的にMystery Playと呼び、中世には聖体節劇Corpus Christi Playまたは単にPlayとも呼ばれ、キリスト聖体祭Corpus Christi Feastとの深い関係の中に発生し発展した。各国においてシナリオの長さには違いはあるものの、旧約聖書から新約聖書までの数十項目のエピソードの集大成であり、西洋演劇史の中でも最も大がかりな演劇の一つと言われており、最も長い作品は25日間にもわたって上演されたとの記録がある。

◆台本

神秘劇はドイツ、イタリア、フランス、スペイン、イギリスなどで主に流行したが、どの国においても共通しているのは、台本の題材である。教会が民衆にわかりやすく聖書の内容を伝えることを目的としていたことから想像できるように、台本は、旧約聖書の主要な物語、四福音書、聖書文学、外典などであった。初期の頃は台本作りにおいても聖職者が中心となっていたが、次第に、各国において市民参加型の形態へと変化していった。町の商人をはじめ、様々な職種、また様々な年齢層の市民が劇に参加しているこ

とは特徴の一つである。イギリスでは一つのエピソードをそのエピソードに関連した職人組合（ギルド）が担当するようになっていった。それぞれのギルドは、切磋琢磨し、よりよいものを作るようにと工夫をこらし、次第に大がかりな物として展開するようになったⁱⁱ。台本における人物描写において注目すべきことは、個人の運命を扱うのではなく、抽象的人間像を描いていることである。キリスト教化した国家の宗教的共同体意識からすると、聖書の物語は人類一般の運命であり、救済史なのであったⁱⁱⁱ。個々のエピソードはそれぞれ劇としては独立しており、原因と結果という関係で結ばれてはいないが、神による人類救済計画の意味とテーマという意味で、すべてが互いに関連し合っている。旧約の出来事は、新約の先駆けであり、その意味が新約において成就されるという解釈は、予象（型）論（Typological Interpretation）と呼ばれ、中世神学の基本を成す。これは、ゴシック建築の教会の窓を飾るステンドグラスや礼拝堂の壁画、教会の玄関の装飾プログラム、聖画や祭壇画など多くの造形美術に表現されているが、神秘劇のクライマックスは、キリストの生誕と受難である。これを中心に、旧約からのエピソードと最後の審判を前後に配し、キリストの生涯の意味と、十字架の意味を問う構成となっている。

台本について注目すべきことの一つとして、新約聖書の「外典」の復活がある。新約聖書の「外典」は、プロテスタント教会には馴染みが薄いですが、四つの福音書の執筆とほぼ同時代（1世紀頃）に、おびただしい数のキリスト伝やマリア伝が書かれており、カトリックではこれらの様々な「外典」に親しんでいる。これら「外典」は、民衆の素朴な好奇心と物語への志向から生まれたもので、イエスがどのような家庭生活をおこなっていたかなど、「正典」には書かれていないイエスやマリアやヨセフなどの人間味あふれる姿などが描かれている。しかし、「外典」が俗化されるにつれ、次第に教会から迫害されるようになり、アレクサンドリアの大司教アタナシウス（295-373年）によって追放されることになった。その後も外典は人知れず地下深いところで生き続け、一千年を経て不死鳥のごとく姿を現した。中世の教会は、神の实在や教理の現実性を民衆に信じさせるには、人間味あふれる媒介者が必要と痛感し、「外典」を積極的に利用する試みがなされ^{iv}、この外典を元にして多くの神秘劇の台本が書かれることとなった。

◆作者

中世の宗教劇を執筆した作者は自分の名前を表に出さなかったと過去数百年いわれてきたが、実際には、10世紀のトロース作家ノトカー、11世紀にダニエルやラザロや聖ニコラウスに捧げる劇を書いたヒラリウスを初めとして、15・16世紀に至るまで各国で明らかになっている作者が多数いる。いずれにしても、作者は、カトリック教会の教義に精通し、修辞を駆使した説教の技術をもち、人々の心の琴線に触れる優れた詩文を書く事のできた教養ある聖職者であった。主に聖職者といっても、その中には法律家や公証人をつとめるもの、プロの作家もあり、イギリスのジェフリー・チョーサーは大蔵省官吏であって聖職者ではなく、ジョン・リドゲイドは、ヘンリー6世の宮廷第一の詩人であると同時にベネディクト修道会の修道士でもあった。これらの人々はすべて、教会に奉仕する芸術家であった。劇を書いた人は、完全な台本を一冊提出し、台本が提出されると、筆写者が雇われ、台本に基づいて出演者一人ひとりのための書き抜き台本ときっかけ帳が作られた。劇によっては、何百人もの人が出演し、出演者の多くが一人で二役以上を演じることもあったため、台本作りは大がかりな作業であった。

◆運営

教会は、台本を受け取ると、その劇の製作を教会の手の内に留めておくか、平信徒との間で責任を分担するのを選択しなければならなかった。ほとんどの場合、聖体の祝日の趣旨に従って、平信徒と分担するのがよいということになった。また、制作費がかさむようになるにつれ、平信徒の関与が盛んになった。イタリアとスペインでは、おもに慈善活動を通して行われたのに対し、ドイツ語圏の国々とイングランドでは、裕福な大商人と彼らが支配していたギルドが製作に積極的に関わるのが普通であった。

上演にはチェスターでは3日間、ロンドンでは1週間、1547年のヴァランシエンヌでは25日間も要したほどの長大な劇であったため、製作に関する仕事は、いずれもかなり手間のかかるものであり、ある種の委員会による管理が必要であった。出演者は契約書を取り交わす必要があり、出演料を受け取ることや罰則などもあった。多くの出演者が本業の合間に練習するために、早朝の稽古やリハーサルが一般的に行われた。リハーサルにきた人々のために朝食を準備し、その費用の記録を忠実に帳簿につけていたという記録もある。また、出演者には、朝と夕べと決まった時間に祈る時

間がもうけられ、この習慣が、出演者の霊性を整え、上演にむけて、皆がひとつとなる土台となっていたことは、神秘劇の製作過程において見逃すことのできない事実であった。

◆出演者

初期の典礼的神秘劇は、聖堂の内陣（祭壇のある部分）で演じられていた。その後、聖堂の内陣から聖堂前、そして町の中へと開かれていった。初期の出演者は聖職者が主だったが、教会のコーラスや附属学校の生徒が参加することもあった。規模が大きくなるにつれ、後期の神秘劇には、市民がこぞって老若の別なく参加するようになり、神秘劇が一地方、または一市町村をあげての祭典ともみなされるようになっていった。神秘劇の世界の成長の背後には、熱心にキリスト教の宣教・伝道に励む指導者たちと、社会的現実と楽しみを舞台に求めてやまなかった民衆との精神の融合があり、それが、独特な中世的精神共同体を形成していた^v。これが神秘劇の大きな特徴であり、復興後の現代にも見られる形である。

子どもと女性について言及すると、子どもたちは聖歌隊として参加することが多かった記録がある。イタリアの多くの聖劇は多くの場合、少年だけで演じられていた。また、ドイツ、フランス、イングランドでは、子どもたちに「天使」の役を割り当てる習慣があり、エジプトの王や東方の三王といった王侯貴族の従者のなかに子どもが演じた記録がある。女性の出演に関しては、中世では女性が劇に出演することはなかったと広く信じられているが、例外もあった。チェスターのサイクル劇中の聖母被昇天の場面は、宗教改革前に書かれた上演予告によると「町の女たち」に割り当てられていた。フランスでは、北部のメスで1468年に聖カタリナの役が女性によって演じられ、南部の小都市ロマンで1509年に上演された「三人の高位聖職者の劇」では、女性の役はすべて女性によって演じられた。女性は16世紀スペインの聖体劇に見られる多くの舞踏にも出演していた。これらの舞踏の経費はグレミョと呼ばれるギルドが負担し、出演者は出演料を受け取っていた^{vi}。

◆舞台

劇空間は、極めて限定された教会内の典礼場から発した。劇の大主題や基本的な劇構造には違いはないが、場面の付加に伴う内容の変化と会衆の増加は、劇空間の教会内から教会外への移動を推進することになり、

マンションと呼ばれる野外装置の配置が一般的となった^{vii}。中央の主要舞台のまわりに、少なくとも、最後の晩餐の行われる宿屋（城）、裁判の行われる議事堂、オリーブ山、司祭の邸宅、天国、地獄をあらわす小舞台があった。中央の主要舞台は、エルサレム、町外れ、ゲッセマネの入り口、あるいは裁判所として使用されることもあった。小舞台と主要舞台をかわるがわる用いることにより、多次元にわたる様々な場面を、緊張感を高めながら展開することができたようだ^{viii}。

イギリスでは、中世の間、固定した舞台はほとんど見られなかった。特に、降誕祭の行列から発展したとみられる「パジェント」（循環聖史劇）が好まれていたという理由による。「パジェント」は、それぞれのギルドが担当するワゴン（山車）に特定の場面装置を設置して、街路を循環し、一定の街の広場で割り当てられた劇を上演するもので、中世宗教劇の場割的劇構造を最も端的に反映した形式であったと言える。日本で降誕劇のことをページェントと呼ぶのは、この「パジェント」に由来している。ワゴンの舞台は二重構造で、上の階が舞台、下の階は装置をかくしたり、俳優が衣装を着替えたり、また、舞台上の人物が突然姿を消したりするのに用いられた。（図1参照）

II 神秘劇の宗教的起源「聖体の祝日」 (Corpus Christi)

これらの神秘劇は、聖体の祝日Corpus Christi（コーパス・クリスティ）と密接に結びついていたと前述したが、なぜ、聖体の祝日が劇を生み出したのかという理由は、1215年に教皇によって定められた聖体の実体変化の教義にある。神がキリストのうちに人間として現れたという、新たに体系化された知的、哲学的概念をどのような手段と方法によって庶民に提示するかという問題が教会内で起こった。礼拝の形式と教化の方法の両方を根源的に再検討する事から様々な変化が生じたのであるが、その一つが、聖体を中心にした新しい劇の誕生であった。この新しい劇は、キリストの神性よりキリストの人間性を強調し、祭儀や信心よりも教化を目的とし、あらゆる階層の民衆を対象とした。初めからルードゥス（劇）として構想されたのであって、オフィチウム（儀式）として構想されたのではなかった。この劇は各国の言語で書かれ、キリスト教世界の普遍的言語であったラテン語では書かれなかった。さらに、歌い手としての訓練を積んだ学問ある聖

職者だけのものではなく、むしろ平信徒が上演に参加するように作られていた。

この新しい劇と実体変化の教義によって奇跡の地位を与えられた聖体とを結びつける働きをしたのは、聖体に込められた新しい意義をキリスト教的な礼拝によって祝う目的で制定された新しい祝日「聖体の祝日」（コーパス・クリスティ）であった。1264年に、教皇ウルバヌス4世が教会暦中の新しい祝日として聖体の祝日を設けるという内容の公開勅書を発表し、1311年にクレメンヌ5世によって実施された。聖体の祝日に行われたコーパス・クリスティ祭は、みずから人間となって十字架上で受難することと引き換えに人類を罪から贖おうとする神の意志に対して感謝をささげる祭りであった。それゆえ、劇は、キリストの受難がクライマックスとして描かれ、それを説明するため、初めから（転落→贖い→審判）というパターンのサイクル劇の性格を持っていた^{ix}。

「コーパス・クリスティ」は、新しく制定された祝祭日だったので、教会の正式の暦から外れていた事もあり、祝祭につきものの礼拝儀式が定まっておらず（聖書の引用や聖歌など）、行列の他に、それぞれのコミュニティの人々が祝祭日に相応しい素材を聖書や宗教儀式の中から自由に選び、独自に祝うことができたのである。

III 神秘劇の音楽的起源「トロープス」(Tropus)

音楽史上から紐解くと、中世の単旋律による聖歌の「多声化」へ向けての変遷が中世演劇（典礼劇・神秘劇）の成立にとって重要な起点となっていることは間違いないと言える。初期キリスト教においては様々な地域で教会を中心にそれぞれ異なる聖歌が歌われていたが、その後教皇グレゴリウスI世（在位590～604年）の号令のもと、それらが統一的に編纂され、新たなローマ聖歌として西ヨーロッパ世界に普及していったとされる。いわゆる「グレゴリオ聖歌」の名で表記され、西洋音楽史における最も重要な源泉として認識されながら、現代を生きる我々の精神にも深々と強烈に訴えかけるこれらのローマ聖歌は、元来単旋律によって典礼文が歌われるものであったが、9世紀以降、この既存の典礼文を補足、説明する新たな言葉が挿入され、それらが新たな旋律の上に歌われるようになる。このように既成の聖歌に新たな歌詞を伴って付加された旋律句の部分は「トロープス (Tropus)」と呼ば

れ、10世紀から13世紀にかけてフランスやドイツを中心とした広範囲に流行、発展した。「付け加えられたメロディー」を意味したラテン語の「Tropus」という言葉は、「付け加えられた歌詞」を意味したが、やがて新しい文や新しい音楽的装飾のことをも指すようになった。G. ウィッカムは「追加された歌詞と音符とを調和させ、それぞれを式文とメロディーとに適切に結びつけていく作業は、トロープス化と呼ばれるようになっていった^x。」とも指摘している。このトロープスという手法・習慣の発展と多様化が基となって西ヨーロッパの典礼劇は誕生し、その劇音楽的要素を発展させていったと考えられる。

トロープスという手法が生まれた背景として、ミサ曲における「キリエ (Kyrie)」（憐みの賛歌）等においては歌詞が非常に短く単純であることから、単語を歌う場合に一つの音節に対して複数の音符を割り当てるメリスマ技法が多用されていたことが挙げられる。つまり、このメリスマ部分に補足説明的な歌詞が付加され、やがてそれだけでは満足できなくなり、一部の旋律が繰り返されたり、新たな旋律が挿入されたりするようになった。そして上述のような流行や多様な発展の過程において、特に復活祭やクリスマス等の「イントロイトゥス (Introitus)」（入祭唱）において、対話（問答）による形式をとるトロープスが生み出され、これこそが典礼劇の起源となったと考えられる。

またこの頃から、聖歌の元の旋律に対して4度あるいは5度の間隔で並行して動く声部や、元の旋律と反対に動く声部が、同時に重ねて歌われ始めたことは、その後の西洋音楽に対する思考の発展へ向けた重大な分岐点である。このように従来からの旋律に新たに付加された対旋律「オルガヌム声部」の誕生こそが、後のポリフォニー（多声音楽）の基礎となったことは明白だが、その背景にはローマ聖歌を基としたトロープスの発展がある。金澤が、「言うならばオルガヌムは、トロープスを立体的に構想したものである。既成の聖歌に何らかの新しい要素を付け加えて、より内容の濃いものにしようという発想そのものにおいては共通している。そのような考え方が、この時代の教会や修道院に普及していたということも、歴史的に重要な傾向と考えられる^{xi}。」と指摘しているように、典礼劇・神秘劇の発展における音楽の役割の重大さを認識する上で、この関連性は非常に重要であると言えよう。

IV 神秘劇の復興

イギリスにおいては、14世紀からおよそ200年の間、主要都市で、コーパス・クリスティ・サイクル劇を毎年上演していた。キリストの「犠牲」と「復活」を記念するコーパス・クリスティ祭（聖体祭）に上演された劇をイギリスでは主にサイクル劇とよんでいた。天地創造から最後の審判までの、主として新旧の聖書に基づく数十のエピソードを集大成（サイクル）したものであり、人類の救済がテーマとなっていることは他の国の神秘劇と起源を同じくする。上演にはコミュニティのあらゆる階層の人が動員され、多額の費用を費やして行った国民的祝祭劇と呼ぶにふさわしい劇であり、シェイクスピアを産んだ英国の肥沃な演劇的土壤に多大な貢献をしたことは明らかである。

現代において、ほぼ完全な形で残されている神秘劇の台本は少ない中、イギリスでは、四つの戯曲集が残されているのみならず、20世紀半ばにこの神秘劇の復興がイギリス各地において見られるようになった。イギリスにおいて台本の写本が完全な形で現存するものは、下記の四つのサイクル^{xii}であり、これをもとに今日の上演も行われている。

◆York cycle (ヨーク・サイクル) :

British Museum所蔵

最も古く完全な形で残っているヨーク・サイクルは、北部英国のキリスト教の拠点であったヨークの町において上演されていた。1430年から1440年にかけて改訂された記録があるが、作者は不明である。1415年にRichard Burtonが作った上演演目には50以上の挿話があるが、現存するのは48の挿話である。

◆Towneley cycle (タウンリー・サイクル) :

Huntington Library of California所蔵

ヨーク地方の方言・慣習・地名などが用いられていることからヨークとの関係も指摘されており、ヨーク地方の町Wakefieldの名が二度言及されているため、ウェイクフィールド・サイクルとも呼ばれている。現存するのは32の挿話である。

◆The Chester cycle (チェスター・サイクル) :

British Museum所蔵

チェスターでサイクル劇が初めて上演されたのは1375年であるが、現存する五つの写本は全て16世紀後半から17世紀初めに書かれたものである。1540年頃の

上演予告には26の挿話が記録されているが、現存する写本には24の挿話しか収められていない。宗教改革の影響でマリア崇拜と聖体祭がピューリタンの攻撃の対象となったためと考えられている。

◆The Ludus Coventriae cycle (ルーダス・コヴェントリー・サイクル) : British Museum所蔵

N-townで上演されたことから、Nタウン・サイクルとも呼ばれる。1392年にはすでに存在しており、その後1世紀にわたって改訂、改変、付加されて現存の形となった。1468年に大幅に改訂された記録が残っている。大部分が同一の筆跡で書かれていることから、一人の写字生によって、元の台本から転写されたと考えられる。写本には二つの受難劇が収められており、年ごとに交互に上演された。他のサイクルにはないマリア劇も収められており、他の三つのサイクルに比べて宗教色が濃く、その作品から固定舞台で行われていたことがうかがえる。

イギリスにおける初の神秘劇の復興は、ヨークにおいて、1951年のFestival of Britainの一部として演じられたことである。その後、イギリス各地において復興が行われたが、チェスターでは、5年おきに神秘劇が行われるようになった。中世では、チェスター・サイクルにおいても、それぞれ担当するエピソードには、その話と関係のある職人組合(ギルド)が配属された。特に、「最後の審判」は、どのサイクルにおいても、最も裕福で、実力のあるギルドが担当し、クライマックスを飾る豪華な演出が求められた。以下、現在も上演されているチェスター・サイクルのエピソードの項目と、中世においてそのエピソードを担当していたギルドを記す。

1. ルチフェルの没落 (製革業組合)
2. アダムとエバ、カインとアベル (布地商組合)
3. ノアの箱船 (水道師組合と金輪製図組合)
4. アブラハムと遺作 (理髪師組合とローソク組合)
5. モーセの十戒、バラクとバラム (帽子屋組合、釘屋組合)
6. 受胎告知と降誕 (大工とスレート工職人組合)
7. 羊飼いの劇 (塗装工組合)
8. ケルンの三王 (葡萄酒業組合)
9. 三王の礼拝 (絹織物商組合)
10. 罪なき嬰兒虐殺 (屋根細工師組合)
11. 聖燭節 (清めの式) (鍛冶屋組合)

12. 悪魔の誘惑・姦淫の罪に問われた女 (肉屋組合)
13. 盲目のケリドニアン・ラザロの復活 (手袋製造業者組合)
14. シモンの家のキリスト・ユダの裏切り (靴製造業者組合)
15. 最後の晩餐・キリストの洗足 (パン屋組合)
16. 裁判と拷問 (鞭打ち) (弓矢製造組合、樽箱製造業者組合)
17. 受難 (磔刑) (金物屋組合)
18. 地獄の悲惨 (調理師と旅館業組合)
19. 復活 (皮革商組合)
20. エマの館でのキリスト・トマの疑問 (馬具製造業者組合)
21. キリスト昇天 (仕立屋組合)



図1 (Medieval Chester Mystery Play)^{xiii}



図2 (Chester Mystery Play 2013)^{xiv}

22. 聖霊降臨（魚屋組合）
23. 預言者の劇（裁判師組合）
24. 偽キリスト（染色組合）
25. 最後の審判（織物業者組合）

チェスター・サイクルの写本は、五本の現存が伝えられているが、上記引例はパメラ・キングの「チェスター・サイクル」に拠ったもので25篇から成っている^{xv}。チェスターでは、現在でも5年おきに上記のエピソードがチェスター大聖堂にて再現されており、前回は2013年に行われ、今回は2018年の上演を予定している。（図2参照）

一方、ドイツにおいては、アルプスの村・オーバアマガウにおいて、世界最大と言われている受難劇が行われている。1634年に初めて上演され、現在は10年おきに開催されている。野外劇場で行われる劇には、村人たち2000人以上が出演する。イギリスと同様に、オーケストラや聖歌隊、演出、大道具など、劇に関わるすべてが村人によって執り行われている。開催される年は、5月から9月までの間に100回以上、朝から夕方までの長時間にわたり上演されている。次の開催は、東京オリンピックと同年の2020年を予定している。

宗教改革のあおりを受けて、トリエント公会議において、世界的に神秘劇の上演が禁止されてからも長く続いていたのが、スペインのエルチェにおける神秘劇である。現在も毎年8月になると、村人200人による手作りの劇が行われ、「エルチェの神秘劇」として、無形文化遺産となっている。

上記のような文化遺産レベルのもの以外でも、現在において行われている神秘劇の一つとして、各地における降誕劇もあげられる。様々な試みが各国でなされている現代であるが、今後はこれらの現状を知るための調査をしていきたい。

結 論

あらゆる手法で世界の芸術にアクセスすることができる現代に生かされている我々であるが、中世の礼拝や芸術を資料に基づいて完全に再現することは不可能である。しかし、現代には現代人に与えられている信仰・使命・賜物をもとに新しい宗教劇を創造していく可能性を秘めており、実際に各地でその働きが見られる。礼拝が「呼吸」という意味を持つ一方、演劇とい

う芸術も、演じる側と観客とで作りあげる非日常的な空間であり、刹那的な「呼吸」とも言える。この手法を通して、礼拝を造り上げる過程の中に人々が参与することによって、現代においても聖書が約束している神の祝福を体験できる機会が与えられていると言えよう。現代の我々が聖書の物語を演じて体験する時、その出来事は、その人の中で時代を超えて現実のものとなる。それは、中世ヨーロッパの民衆であろうと、現代日本の我々であろうと、聖書の物語がもつ人の心への影響力については何も変わらないのである。

本研究を起点として、今後、近年復興されつつある神秘劇の多様な形態についての比較研究や、神秘劇の宗教的・文化的・芸術的影響についての研究をさらに進めていきたい。

謝 辞

本研究にあたり、文献検索のご指導・ご協力をいただきました、西南女学院大学図書館の皆様へ深く感謝申し上げます。

参考文献

- Eleanor, P. *Drama and Religion in the English Mystery Plays*. Stanford, CA: Stanford University Press, 1961
- Rosemary, W. *The English Mystery Plays*. Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press, 1972
- Richard, B., & Pamela M. K. *York Mystery Plays*. Oxford: Oxford University Press, 1984
- 石井美樹子『イギリス中世劇集-コーパス・クリスティ祝祭劇』篠崎書林, 1983
- 石井美樹子『中世劇の世界』中央公論社, 1984
- グリーン・ウィッカム『中世演劇の社会史』山本浩訳, 筑摩書房, 1990
- 奥田宏子『中世英国の聖書劇～神と人へのスペクトル』研究社出版, 1984
- 川野希典『演劇の源像』晩成書房, 1995
- 金澤正剛『中世音楽の精神史』講談社選書, 1998
- 杉山博昭『ルネサンスの聖史劇』中央公論新社, 2013
- 富田博之『日本演劇教育史』国土社, 1988
- 永野藤夫『中世神秘劇を支えていたもの』新劇, 白水社, 1959
- 皆川達夫『西洋音楽史 中世・ルネサンス』音楽之友社, 1986

引用文献

- i 石井美樹子『イギリス中世劇集-コーパス・クリステイ祝祭劇』p12, 篠崎書林, 1983
- ii Richard, B., & Pamela, M.K. *York Mystery Play*, p12, Oxford University Press, 1984
- iii 永野藤夫『中世神秘劇を支えていたもの』p83, 新劇, 白水社, 1959
- iv 石井美樹子『中世劇の世界』p10, 中央公論社, 1984
- v 永野藤夫『中世神秘劇を支えていたもの』p92, 新劇, 白水社, 1959
- vi グリン・ウィッカム『中世演劇の社会史』pp130-131, 山本浩訳, 筑摩書房, 1990
- vii 川野希典『演劇の源像』pp151-155, 晩成書房, 1995
- viii 石井美樹子『イギリス中世劇集-コーパス・クリステイ祝祭劇』p16, 篠崎書林, 1983
- ix グリン・ウィッカム『中世演劇の社会史』pp88-89, 山本浩訳, 筑摩書房, 1990
- x 同上書, p43
- xi 金澤正剛『中世音楽の精神史』p79, 講談社選書, 1998
- xii Rosemary, W. *The English Mystery Plays*. pp11-15, University of California Press, 1972
- xiii Cheshire Arts Network. (2015, September10). Feature: Chester Mystery Plays. Retrieved from <http://cheshireartsnetwork.pressglue.com/features/5379/feature-chester-mystery-plays>
- xiv Chambers' Book Of Days. (2015, May 15th). <http://www.thebookofdays.com/months/may/15.htm>
- xv 川野希典『演劇の源像』pp149-150, 晩成書房, 1995

“Mystery Plays” : The Origin of the Christmas Pageant

Ayako Higashi, Kazuhiko Uemura

<Abstract>

Biblical plays called “Mystery Plays” were universally widespread in Europe during the middle ages. Mystery Plays were developed under the unity of church and people. For church, these plays were one of the evangelical methods for illiterates, and for communities, plays were festivals that were celebrated among people on every social level. Although the plays took various forms in different countries, it was the only and the greatest mass communication at that time, since the play was consisted of dozens of episodes based on the Creation to the Last Judgments in the Bible, and was performed not just in the cathedral, but also in the pageants paraded through the town.

The purpose of this paper is to explore the religious and musical origins of revived Mystery Plays that can be seen around the world at differing scales, and to study as the beginning of the pursuing potentials of Mystery Plays today.

Keywords: Middle Ages, Mystery Plays, Cycle, Corpus Christi, Tropus